

彼はさう思つて、手近にあつた一つの石塔にすがりついた。

「あらゆる人間苦を嘗めて、すべてを知りぬいてゐる石塔！お前だけがこのおれを休ませてくれる。おれは死なうか知ら。」

彼はフト石塔の裏を見た。チヂチ、チヂチの底から聞えて来るやうな蟲の音が聞えた。

「俗名室伏きぬ。」

その字は月の光りにボンヤリミテらし出されて、かすかに讀めた。

「室伏きぬ！」

それは次郎の母親の墓であつた。

「お、ッ！お母さん！」

次郎はまさしく母親の記憶を思ひ浮べた。

——それは美しい湖のほとり。彼れの生れた家である。日當りのよい縁側で、母親はいつも絲繰り車を操つてゐた。樂屋から彼が歸つて来るに、いつもニコ／＼しながら迎へてくれた。一寸伸びに伸びてゆくわが子の姿を見上げては、樂さうに微笑した。そして晩食は——次郎はお千代のこゝを思ひ出した。

お千代はいつも甲斐々々しく襟がけで、彼のために晩餐の用意をしてくれた、フーツミ温かさうな湯氣のたつ釜を、重さうにおろしては、手馴れた調子で飯をうつしかへたり、お菜を皿に盛つたりした。そして三人は車座になつて食卓を圍んだ。母親はきまつたやうにいつも、次郎が早く一人前になつてくれるやうに頼んだ。お千代はいつも黙つて、微笑みながら、次郎を見守つてゐた。——

それらの光景が、まさしく次郎の胸に蘇へつて來た。

「千代ちゃん。」

次郎はよろ／＼立上つた。墓地は高台にあつた。眺めるに、月の光りを一杯に漂よはせて、琵琶の湖は夢のやうに美しくそこにはびこつてゐた。一筋白い街道が、そのほとりを走つてゐた。次郎はそれを眺めた。

十年前、その街道を次郎とお千代は打ち連れて歩いて歸つた。少年の思ひ出！なつかしい、甘い、淡い戀の思ひ出！その思ひ出が、涌然として次郎の胸に蘇へつて來た。

次郎はたまらなくなつて、墓地から驅け下りた。そして街道をひた走りに走つて十年の間、ふんだこゝのない故郷の土を踏みしめながら、わが家の方へ驅けて行た。

X

見覚えのある柿の木は、昔と同じやうに、その影をクツキリ地上に横たへて、そこに聳えてゐた。

家は？次郎はなつかしさうに、生垣の外から中をのぞき込んだ。家の中には明るい灯がこもつてゐた。フミ障子に一つの影がうつた、それは五つ六つの女の子の影である。

「千代ちゃんは、もう人の母になつたのか！」

次郎はそれを見るにガツカリして急に臉の熱くなるのを感じた。熱い涙がこぼれ出た。何ともいへぬ悲しさが、胸の底からこみ上げて來た。

「おれが運命のまに／＼、他國で他國の女と戯れたやうに、そしてあの綾子と結婚したやうに、千代ちゃんもまた、他の男と結婚してしまつたのだ！」

次郎は頼りにしてゐた人が、急に亡くなつてしまつたやうな、心細さを感じた。
「長い間、何の便りもしなかつたのだから、無理はない、當り前だ。みんな自分が悪かつたんだ！」
淋しいあきらめが、彼を更に悲しませた。

フミ、次郎はブーンブーンいふ絲くり車のひびきを耳にした。なつかしいひびき！次郎は思はず身體を生垣から、乗り出して、家の方へ顔をつき出し、その主を探さうとした。家の中からは、美しい聲で途切れ途切れに、淋しい調子の絲くり唄が聞こえて來た。

「からころから絲くり車

絲はおかいこ、絹のいこ

まゆがをれば心もをさる

くるくくるくくるくくる

來るこいふのは口先ばかり

わたしの待つ人なぞおせい

それは次郎の母親が、いつも歌つてゐたなつかしい唄であつた。次郎はその歌を聞くに、更に身も心もつまらざるのなつかしさを感じて、たまらなくなつた。彼は生垣を踏み越えて、縁側まで入つて來た。唄はまたつゞいた。

「からころから絲くり車

いこはおかいこ、絹のいこ

絲のもつれは大梓小梓

くれば解けそろほさけそろ

胸のもつれは綾絲こいこ

誰がほさいてくれるやら

「千代ちゃん！—

次郎は思はず聲を出してお千代の名を呼んだ。聞えなかつたかして、誰も答へをしなかつた。絲車はやつぱり音をたててまはつた。絲くり唄はつゞいた。

「お主やしら絲わしや紅の絲

わかれくにくるくくる

わかれくになろこてまよ

末ははたをりをさのなか

「千代ちゃん！—

次郎はまた呼んだ。ハタミ絲車がまはつた。唄が止んだ。そして人の立つ氣配がした。障子に女の影がうつたかと思ふに、スーッと静かに、その障子が開かれた。次郎は瞬きもせず、その姿を見つめた。そこにはお千代が立つてゐた。

「お、千代ちゃん。」

青春の美しさを失ひ、疲れ果てたやうな、力のぬけたやうな、つやのない顔をしてゐるが、お千代はやつぱり昔のやうに、あきけない子供のやうな明るい顔をしてゐた。
お千代は縁の下に、ボロくらの洋服を着た、帽子を被らない乞食のやうな男が踞まつてゐるのを見て、吃驚して目を見

張つた。

「千代ちゃん、僕だ、僕だ。次郎だ！」

次郎はお千代にすがりついた。

「お、！。次郎ちゃん！」

お千代はそれを次郎に知つて、椽から飛びをりた。二人は息もつまるほぎ、力をこめて、お互ひに抱きあつた。

「千代ちゃん。千代ちゃん。千代ちゃん。」

次郎は泣きぢやくりながら、お千代の名を呼んだ。お千代は眼に涙を一杯ためて、ヂツミ次郎の顔を眺めた。

「ミウく、あなたは歸つて来たわねえ。」

お千代また腕に力を入れて、次郎を抱きしめたま、ヂツミ眼をつむつた。次郎も眼をつむつた。二人の眼から、ハラハラ涙が流れて頬を傳つた。長い間、二人は動かうもせず、そのま、そこに抱擁をつゞけてゐた。

「ミウミウあなたは歸つて来た。わたしは長い間待ちました。五年も十年も、きつミあなたは歸つて来てくれると思つて待つてゐました。そしてあなたはやつぱりかうして歸つてくれたわねえ。」

「しかし千代ちゃんはまだ子供の母親になつたんだね。」

次郎は聞いた。お千代は淋しく笑つて答へた。

「あれは近所の子供が遊びに来てゐるのです。わたし、ミウして人の妻になりませう。わたしはいつまでも次郎ちゃんの歸りを待つてゐたのですもの。」

「お、千代ちゃん。」

次郎はまたその胸にすがりついて泣いた。

「すまない。すまない。許しておくれ。許しておくれ。」

お千代は首を振つた。

「何にもすまない。こゝこゝはない。あなたはいま、かうしてわたしのミウへ歸つてくれたんですもの。」

次郎はまた叫んだ。

「しかし僕は、僕は、立派な人間になるミウつて出た僕は——。僕は千代ちゃんに逢ふのが羞かしい。」

「あなたは失敗したから歸つてくれたんです。もしもあなたが、もつミ立派になつてゐたら、きつミ歸つては來なかつたでせう。私の待つてゐたのは立派な人ではありません。私の待つてゐたのは、只昔のま、の次郎ちゃんだけです。」

お千代はさういひながら次郎の頭を靜かに撫でた。

母親の温かい懷ろに抱かれるやうに、次郎は始めて、心からゆつくりミ、安心してその場にをれるやうな氣持がした。不安も、恐怖も、焦慮も、何にもなかつた。たゞ安息ミ温かさミだけがあつた。

「僕はもうミウこへも行かない。僕はやつぱり生れた家に来たい。」

「ミウへ行つても、人間の一生は同じです。この田舎にゐたつて、次郎ちゃんはきつミ立派な人間になる。こゝこゝが出来るでせう。」

そして二人はいつまでも、いつまでも、抱き合つたま、月の光りを浴びて、そこに佇んでゐた。風が出て、木の葉がサラ／＼ミ鳴つた。ヂ、ヂ、ミ蟲の音が土にしみ込むやうに聞えて來た。

部屋の中では、双六を遊ぶ子供達のさゝめきし
「上りを取れなかつたものは、もう一べん振り出しに戻つて、やり直すんですよ」

人
間
(終
り)

人
間

定 價 壹 圓 五 十 錢

複 製 許 可 證 字 號

大 正 十 五 年 一 月 十 五 日 印 刷
大 正 十 五 年 一 月 十 二 日 發 行

編 輯 兼 發 行 人 兼 印 刷 人 赤 松 靜 太

印 刷 所

大 阪 市 北 區 中 島 三 丁 目 三 番 地
大 阪 朝 日 新 聞 發 行 所

發 行 所

大 阪 市 北 區 中 島 三 丁 目 三 番 地

株 式 會 社

朝 日 新 聞 社

終

